佐伯十三重塔と中世佐伯氏

宮下良明
（会員・佐伯市晴干区）

佐伯市上岡地区には、石造十三重塔、また栂牟礼城周辺には石造物・仏像・神社等、中世の様式を残したものが多い。それらの関連について述べてみたい。

まず、内容の愚については程度の問題もあって、その辺は前以てお許しを戴きたいとお願いする。

さて、十三重塔は、ご存じのとおり県の文化財に指定され、学者間の研究資料としては一級の石造美術品で、同種のものは全国でも数基しかないと言われている。

数百年の歴史を秘めた、貴重な要素を持つこの優れた塔の建立記録や、古文書・金石文等は今の処発見されていない。しかし、ないからといってそのまま済ます訳にはいかない。常に調査を必要とする。それぞれの研究者の調査の結果が、各書籍に掲載されていて参考にはなるが、核心には遠いと思っている。市の教育委員会の解説文も納得のいくようなものとは思わない。依然実態は霧の彼方とされている。塔下には、今なお平安期とも、鎌倉期とも言われている建立の謎と共に、中世信仰に生きた先祖たちの歴史が眠っている。

学者は言う。

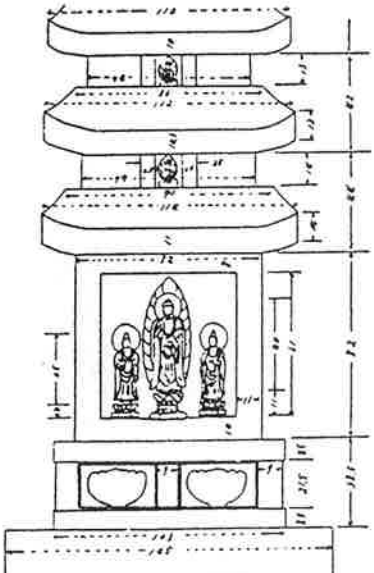
従来の歴史研究において行われている古文書や、古記録といった、文字によって残されたもののみを史料とする研究、換言すれば文字を残すことのできた人々についてのみの歴史研究から、僅少な、九牛の一毛に

も比すべき文字を残しうる人々の存在を可能ならしめた、厖大な数にのぼる庶民の存在が注目されるようになってきた・・・以下略。

と。

言うなれば書かれたものがないからといって、そこが空白であり、歴史がなかったというのではなく、書かれなかった。文字を残し得なかったということで、そこには時代に生きた民衆の厖大な歴史が潜んでいるのであるそれが、中世佐伯と民衆にも当てはまると言えよう。

数百年にわたって佐伯を見詰めてきた十三重塔建立の謎、そこには書かれざる庶民の生きた歴史が長々と横たわっているのである。



上岡十三重塔

十三重塔格狭間

十三重塔の基礎上の壇には格狭間が入れられ、この格狭間も望月先生の調査では、東の内側には細い線を彫り入れて、入隅柱の形にしてあり、この形は、古寺における須弥壇や祖師像の台座等に用いられている手法で、豊後高田の富貴寺の須弥壇に見られるとのこと。

富貴寺は、十二世紀後半（一一五〇ー一二〇〇）の創建といわれ、この須弥壇と同形の格狭間であるとすれば十三重塔の建立年代を割り出す一つの目安になる。

層塔の軸部

初重下軸部四面に三尊仏の彫刻を見るが、これは臼杵磨崖仏や菅生磨崖仏等と同様の形式をとる。いわば、小さな磨崖仏である。望月先生は言う。

三尊仏彫刻も珍しい。博製三尊仏が祖形な意味を持っていると思われるが、層塔の軸部に彫刻された例は知らなかった。

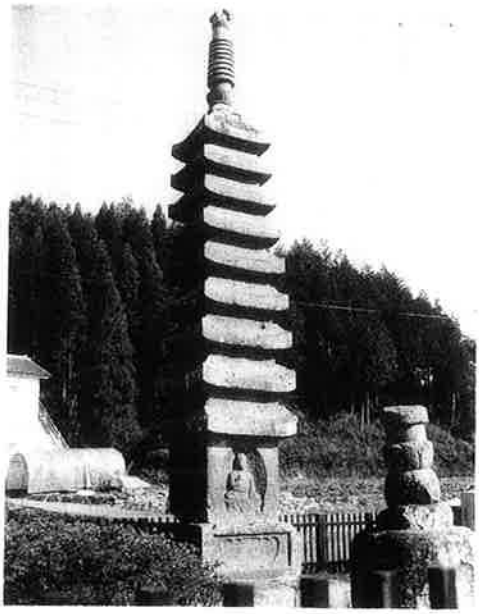
昭和三十三年に京都市伏見区に於て、奈良時代と推定される層塔の軸部が発見された。三茎連座上の三尊仏が彫刻されている・・略。

と。してみれば十三重塔軸部三尊様式は、驚くことに

日本国内にわずか二基だけで、その一基が佐伯市にある十三重塔で、これは、実に得難い貴重な様式をした塔と言えるのである。

三尊仏の様式

軸部三尊仏を見ると、わずかに風化はしているが、本尊や脇侍の姿が分かる。塔の方向が少しずれているように思えるが、本来の三尊配置様式からは、東方薬師如来・脇侍月光菩薩・月光菩薩・南方釈迦如来・脇侍文殊菩薩・勢至菩薩・北方弥勒如来・脇侍無著・世親・西方阿弥陀如来・脇侍観音菩薩・勢至菩薩等とされる。この三尊様式も国東富貴寺の四面仏壁画のとおりである。



野津町王子の九重塔

東面には薬師・南面釈迦、北面弥勒、西面阿弥陀の順で、四仏が陽刻してあり、佐伯十三重塔も主尊は同様である。

北面の金石文には

起立文永ニ火歳
ニ丁卯
卯月八日　僧定仙敬白

と刻まれている（写真上）。

一二六七年の建立。鎌倉中期のもの。藤原時代の名匠定朝の流れを受け継いだのであろう。「定」の一字を匠名として刻まれている。

熊本県湯前町浄心寺の九重塔

去る一月十六日、汐月副会長・佐藤事務局長・御手洗義夫会員と私で、湯前・米良を見学に行った。その時の浄心寺の記録は次のとおりである。

湯前浄心寺九重塔　金石文

奉造九重塔一基　右志者浄心往生極楽也
寛喜二年庚九月　三日　大壇那　沙弥浄心
大工兼仏師幸西　院主念西
「本堂三尊仏」国宝　右観音菩薩　中央阿弥陀如来　左勢至菩薩　寛喜元年卯月日（一二二九）
墨書

湯前浄心寺本堂　阿弥陀如来三尊仏（国宝）

本尊阿弥陀如来・脇侍観音菩薩勢至菩薩共に樫野区の庵仏像とよく顔・形等似ている。年代も同じ頃のものではないか。

今山豊翁の話

十三重塔は、地元では古来から「九仞（ジン）の塔」と呼ばれていた（昔の人の目ずんばいで九仞（ヒロ）という意）。現在地の上が尾根続きになっていて、その先端に塔は立っていた。見晴らしは良く、遠くからも眺められた。

昭和二十六年、ルース台風で倒壊、その時の復元の際基礎下におびただしい丸い小石が敷き詰められていて、その小石に墨で一字ずつ字が書かれていた。その上を赤土で締め付け、また一字の書かれた小石を敷き並べ、その上に塔が建てられていた。

真中の土中には壷が一つあって、中には灰が入り、壷の口から基礎上まで螺旋状の穴が作られ、上から物を入れると、中の壷に入るようになっていた。

基礎外の四隅にまた壷があったが、それは教育委員会が持って行った。多分、その壷は、後世何者かが埋めたものと思う。

昭和四十四年、仲谷紡績工場設立の時、塔の山をけずり取り、十三重塔も現在の位置にまた移転したが、それは、私の区長の時で、地元の各区長が立ち会った。

樫野の庵の本尊、阿弥陀如来座像（脇侍は観音と勢至

もらった。

藤原・鎌倉時代の匂いのする、樫野の阿弥陀仏三尊と十三重塔とは、一連の関係がありそうである。熊本県湯前浄心寺の阿弥陀如来像（国宝）、そして十三重塔（現在、八代市）と比べ、佐伯十三重塔・樫野区庵阿弥陀如来像は、勝るとも劣らぬのではないだろうか。また、様式がほぼ一致するところから、建立年代を割り出すもう一つの目安になると思う。

十三重塔の建立目的

五十六億七千万年後、末法のすたれる頃、弥勒如来が衆生を救う

という、藤原時代の思想、その仏教の経文、法華経の一部、如法経を写経して経筒、または壷等に入れて、土中に埋め、その上に塔を建てる。それを経塚というが、十三重塔も、当時の法華経信仰の影響を受けて、石に写経して基礎下に埋め、その上に塔を建て、礼拝の対象物としたのであろうか。いわば経塚のようなものである。そのように解釈すれば納得がいく。近世の一石一字塔も同じ意味を持ち、経塚の延長の現われであろう。

中世佐伯荘と信仰

湯前浄心寺の九重塔

湯前浄心寺の七重塔

の両菩薩）の須弥壇に約千年程昔の年号と文言が書かれていたが、書き取り時の不始末から駄目になり今はそれは分からない。色々貴重な話と共にこのように聞かせて

「中世史」学者は言う。

中世は「宗教の時代」と。一見、宗教と直接関係のないような人も含めて、全ての人々が、その階層や地域の別を越えて、何等かの形で宗教と共に生きていた上は国家権力を担う天皇・将軍をはじめ、下は名もなき無知蒙昧の一般衆生に至るまでの全ての中世人は、宗教的な生き方を余儀なくされていたのである。逆説的にいうなら宗教を抜きにしては生活が成り立たないということが、中世的な生き方である・・略。

と。

中世の宗教的信仰を想定すると、おぼろげながら当時の佐伯荘が見えてこよう。時代と共に発展した現在の佐伯を念頭に、その上に中世佐伯荘を連想しても、そこからは答は見えてはこない。栂牟礼を囲む信仰、つまり、十三重塔等の石造物・仏像。弥生町の磨崖層塔等を総合して感じることは、中世佐伯荘は密教の世界であったことに気が付くのである。

そしてまた、その周辺の神社名を、昔の信仰名に直してみると、ほとんどの神社が権現名であり、如何にこの地方に権現信仰が根付いていたかを知ることが出来る。

明治の始め、廃仏毀釈の命により権現が切り捨てられ総べて神社名に統合された。権現は仏であるからである権現信仰が多いということは、修験道によるものであるが、換言すれば、修験者（山伏）や聖僧（ひじりそう）等がその統率的地位にあったものと推測される。現在の神社名を神仏混肴の時代名に直すと、熊野権現・愛宕（アタゴ）権現・白山権現・山王権現・王子権現・三所権現・大獄権現等となる。中世の佐伯荘は権現信仰の時代ともいえ、それ等を解明することによって中世が見えてくるのである。

中世佐伯氏と修験道

大神系佐伯氏は、修験道の流れをくむ。領主的統率者には間違いない。

熊野三山、大和・奈良・吉野の霊山に入峯して修業を重ね、満願の暁、大僧都・阿闍梨（あじゃり）等の位を戴いて地方に帰り、権現信仰の上に立ち、民衆を導く。それが中世的な修験世想で、大神系佐伯氏にもそれが当てはまるのではないか。武力によって民衆を統治した領主ではあるまい。それらしい城もなければ、武器を貯えていて、そこに武士を常に養っていた形跡もない。大

事があれば、信仰に結ばれた民衆が立ち上がる。それが中世佐伯領の姿であろう。祖母嶽を信仰した大神系の各氏族、九州の山岳を修行の道場とした阿蘇氏・高千穂氏米良氏・菊池氏、各氏族の居住する所、必ず崇拝する大権現が祭られていて、しかも熊野・愛宕・王子・白山等の社名が多い。如何に中世が密教的修験道の信仰世界であったかを如実に物語るものといえよう。今後の課題として目を向ける必要があるのではないか。そしてまた、祖母・阿蘇等の山岳信仰をする氏族と氏族を繋ぎ合わせると、中世社会の各氏族と佐伯氏との歴史のもう一つの側面が見えてくるようである。

佐伯氏と米良氏・菊池氏等の関係も、掘り下げれば実に奥が深い。また、中世を知る上に価値ある研究と、私なりに思うのである。

佐伯領域の先祖達が築いた数々の石造物、諸々の文化財、それと共に伝承された民俗行事、それ等を無視した中世の佐伯氏を語るには、多くの難点がある気がしてならない。

十三重塔が何かを語ってくれそうである。名実ともに佐伯地方の「シンボル」であろう。

表紙解説

『高鍋藩・海路図』

西米良の帰りに高鍋町の歴史総合資料館を訪れた。秋月氏の治めた高鍋城跡、舞鶴公園の中にある。

当資料館所蔵の『海路図』が、頂いた「要覧」の表紙に使われていた。しかも、二万石佐伯城が正面中央に掲載されていたので感激一潮であった。

園内には復元された万歳邸や、刀工鍛冶場などがあって、周囲の庭園も見事である。

ついでながら佐伯藩四教堂の教授を務めた秋月橘門は高鍋藩の出身者である。

さとうたくみ